米寿銀盃に感謝

園田太郎

新緑香る好時節老人共生き生して暮らせる比好季節誠に誠にスガスガしい思出です。さて此度私が十月二十八日「米寿」に相当するにチナミ御心なる銀盃御恵贈被下有難く感激し拝受しました。園田家の家宝として大事に御飾りして皆様の御厚志拝謝します。私は去る四十一年以来トント辰巳会へは出席出来ず欠礼して居ます事御許し願ます。知人の皆様方へも何卒御伝えいただければ幸です。右御礼の辞まで皆様の御多幸御祈します。

相原保

此度は思い掛けなくも私が来春喜寿を迎えまするにつきまして御丁重なる御祝辞並に高畑会長御真筆のすばらしい高松塗大杯一個を賜わり私の喜びこれに過ぐるものは御座居ません。厚く御礼申し上げます。永く永く家宝として珍重仕ります。

野並臣夫

謹啓私儀来春喜寿の故を以て見事なる大杯御恵送下され洵に有難く厚く御礼申上げます。長く家宝として珍蔵いたし度く存じます。

武藤様米寿

堀内宏展

昨年九月、神戸オリエンタルホテルにて武藤作次様の米寿の御祝が約八〇人の参列者にて盛大に催されました。数々の立派な御祝辞や音楽、声楽のリサイタルがあり誠に意義深く辰巳会よりも立派な記念品の御贈呈があり又武藤様御夫妻の胸像を記念として高畑会長より贈呈されました。此の胸像の記念品に付きましては武藤様の御承諾を得べく山崎敏明氏と共に御意向を伺いました処堅く辞退されましたが高畑様、永井様に恐縮しながら御相談申上げました所良い事に気が付いた是非纏めるようにとの御督励の御言葉を戴きましたのに力を得まして大屋様、安並様始め三〇余人有志の賛同を戴き取纏めに付ては殆んど山崎敏明氏の御尽力に依り贈呈式の運びと成りました。今後辰巳会の先輩の方々にて此のような目出度い事に直面される方々が次々と出られる事と思いますのでその際側近の方々が留意されて居り我々後輩にて協力第二第三の目出度い挙式の催されますのを切に待望して武藤様の米寿の模様を報告さしてもらいます。

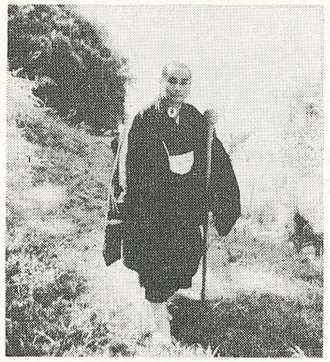
新著御紹介

鹿岳光雄著「一隅を照らす者」

——随筆・宗信和尚——

今回計らずも小生の佳友かって岡本梅林で知られた宝積寺鹿岳魯山禅師の大胆且つ流麗なる執筆に依って神戸篠原祥竜寺菅宗信禅師の遍歴、数々の半生逸話を巧に纏められ「一隅を照らす者」と題され見事上梓されたことは尤もよろこばしい。

先般奈良依水園に於ける無我有楽の一日、あの大雨の中を一門引き連れ雲水姿ではるばる法要に臨まれた導師が即ちこの書の主人公で異様の表情の中に慈愛溢るるばかりの温顔が思い出されることと思う。



菅宗信禅師

この八〇頁足らずの小編ではあるが著者の筆勢寸鉄禅の心随にふれるところ尠からず是非共諸兄の御一読をお勧めし度いものである。

御申込先は

神戸市東灘区本山町岡本字野間33
宝積寺宛
頒価八〇円　送料一冊三五円
売り上げは今良寛宗信和尚の聖業に寄進する。

（柳田生）

梅野名大教授ら九人に助成金

日立製作所会長　倉田主税氏の美挙

わが国の科学技術振興のため故倉田主税氏（日立製作所会長）の退職金で作った財団法人国産技術振興会は四十四年度の研究助成金（倉田奨励金）として総額一千百五十万五千円を名古屋大梅野助教授ら九氏に贈ることになった。贈呈式は三月二日東京経団連会館で行われる。受賞者とテーマ次のとおり。

名古屋大工学部教授　梅野正義氏
「半導体プラスマに依る遠赤外線領域における新しい電磁波発生器の開発研究」（百七十万円）

東大工学部助教授　大橋秀雄氏
「ターボンプの動特性に関する研究」（百九十万円）

東大工学部教授　森政弘氏
「多品種生産の自動化を目的として人工両手系の研究」（百六十万）

東大理学部講師　宮永健氏
「メスバウアー分光法を用いる金属錯体の研究」（百二十万円）

名古屋大理学部助教　野依良治氏
「光励起休を用いる有機合成反応の開発」（百万円）

阪大工学部助教授　平木昭夫氏
「耐放射線半導体素子製作に関する研究とその試作」（百九十万円）

東大理学部教授　菅野卓雄氏
「ショットキー障壁を用いた高エネルギー電子の真空中への放出」（百四十八万円）

東大理学部助手　田隅三生氏
「光散乱の微細構造の研究」（百二万五千円）

東大工学部助教授　宮原諄二氏
「半導体プラスマに依る遠赤外線領域における新しい電磁波発生器の開発研究」（百七十万円）

東大工学部助教授　柳田祥三氏
「ニトルとホスゲンの反応に関する研究」（五十万円）

註　柳田祥三君は柳田義一氏の令息にて阪大工学博士小森三郎

済美寮を巡る

山成卓爾

大正六年鈴木商店に入店と同時に大阪支店会計部に廻され、宿舎は天王寺の御寺にて約十名と一緒なりしも同宿者の名前は何分五十余年前の事とて覚え居らず。三ケ月後金物雑貨部部長松本褒一さんの下で会計記帳係を命ぜられ、時を同じくして空堀に新築の済美寮での生活が始まった。支店長は井原五兵衛さん、冬和服で御出勤されダルマストーブの前で裾をまくりあげ暖を取られる異様な御姿を思い浮べる。

大阪済美寮

この寮は八人部屋六室、六畳の間が確か十室、大きな門の入口近く二階建の社宅四軒、庭には独立の風呂場と柔道部屋がもうけられ、外に相撲場もありどこからみても堂々たるものなり。長堀橋畔のお店への往復はてくてく、勿論三食共お店の食堂にての結構な身分。

数々の楽しい思い出の内、砂糖部の吉原君、好川翠君を大将とせる相撲、夏は時折り六、七名にて町の中の角力場へ他流試合に出掛けたり。或る夜お店の食堂の二階にてどたんばたんと相撲を取り居りし時、お家様が御供を連れ突然御来店、「何を致し居るや」と御叱りを受けし事を覚え居れり。腹一杯夕食をとりし後帰寮せしに空腹を感じ悪友と「おい、うどんの食べくらべをやろう、汁一滴も残さず一番多く食いし者が勝で只食いや」と八杯食べ勝ちせし事あり。

又或る時麦酒部の柴田忠君に誘われ御店の前の長谷川向側のビール倉庫にてサクラビールを只飲の旨さ忘れられぬ事なり。

本店米騒動焼打の時は大阪支店及び空堀済美寮は暴徒に包囲されしも幸い焼打は免がれ長堀橋上より悄然と支店を打ち眺め終夜立ち尽せり。

一の谷寮

一年後本店機械部に転勤を命ぜられ兵電一の谷停留所近き一の谷寮（金子様邸宅の下）古き民家にて同宿者には倉庫部の三谷君、土居樽男君、ロンドンへ赴任せし相原保君、造船部の常深純一君、機械部の故板垣君等が起居を共にせり。此処にては又愉快なる事多かりけり。二階より「おい、汽車が来たぞ」との声にて歯ブラシと歯磨粉をポケットに押込み須磨駅に駆けつけ木の柵下より飛び込み、列車の洗面室を利用するを常とせり。日曜日は近所のテニスコートへ出掛け永井支配人へ猛打を浴せ溜飲を下げ夏は疲れば線路越にて海水浴。休日の食事は寮のばあさんが拵えるのを好い事にして明石鯛の刺身に加えるに酒附き。ところが野菜屋に適当につけさせし勘定書を前に桑田庶務部長より「君等は何んと野菜を多く食べるか」とやっつけられ、「一の谷寮に他の寮より多数押掛け食い倒し居る。今後一切食事せぬ様願度し」と逃げし事あり。この頃ばけつ、やかん、茶碗等を打鳴らしてのコーラスは全く御近所迷惑。

オリ部屋

懐しき所にて坂下のうどん屋の可愛いお常さん、思えば小島実君、菊地輝男君等と一緒に毎夜のように張りに行きしものなり。又電車筋向側の洋食店にて酒飲みのおやじとあいの子のお姉様相手に、テキにての一杯忘れられなき事なり。朝は早起会にて再度山へ橋本時二郎君、畑薫君等と一年三百回の金メタルはとても無理、百回の銀メタルを目標とせしも駄目。

お店の朝食時間に遅れば食堂の裏口よりこっそり這入り込み女中さんを嚇し味噌汁三杯めし。

休日には岡田猪太郎君（外電部）とよく握りめしを腰にぶらさげ摩耶山又は六甲山登山。そして帰寮後の牛肉のすき焼きの旨さ。

小遣が無くなれば石炭部の川口君等とよく市内のお寺に説教を聞きに出掛け、ばあさん連中より「お若いのにようこそ御信心」と賞められしことあり。

中山手寮

一番大きな寮にて社員会にて一週間に一回謡曲会を催し居り寮員の安眠妨害とて、謡の出来ぬようにと二、三の悪友と語らいデカンショ等々を歌い妨害せし事あり。

本店よりの帰途元町の入口の「ザンボアー」バーにてカウンター上の南京を肴にカクテル一杯五十銭、二、三杯にてほろよい気分にて元町三丁目のおでん屋、時折は三味線を聞きに花隈へ、楽しき思出なり。

結び

上記の寮生活は我が一生を通じ全く愉快なる楽しき思出にて大阪支店金物雑貨部にて会計係一ケ年、本店機械部にて外国通信係四ケ年、販売係五ケ年、英語は故須田さんに、セールスは武藤作次さんにと徹底的に仕込まれ、鈴木商店一筋に仕事仕事に打込みこれからお店に御返し出来得ると自信せる折、お店の没落、残念至極。次いで浅野物産KKに転職、大阪、新京、奉天、大連、天津に転任、北京にて終戦を迎え大阪、東京、バンコックと転々此間三十年。

子会社浅野鑿井工業KKに転じ十ケ年。顧みれば鈴木に十ケ年、浅野物産に三十ケ年、浅野鑿井に十ケ年大過無くすごし得しは鈴木にての御仕込みの御蔭と感謝致し居る次第なり。五十五才迄の社員生活、六十九才の人生停年も相済ませ現在七十二才の隠居生活なるも幸い心身共頑健にして未だ働く能力あり。